皆様こんにちは。平田でございます。今日は高柳先生の「ビクター高柳会」第一回の大切な会でございます。ここで私が冒頭のご挨拶をするのは、高柳先生の愛弟子の方々がいっぱいいらっしゃるのにと大変固辞したんですけれども、藤本さん、廣田さん、中村さん、この幹事の方々が非常に熱心に会の設立にまでに努力していただいて、その3人の方々から強く要請があり、ちょっと僭越だとは思いますが、ご挨拶させていただきます。

藤本さんから苦難の時期という話もありましたけれども、私はある意味で日本ビクターの戦後の一番いい栄光の時期を、ここにいらっしゃるみなさん方と共に共有できたという実感を持っております。

そう申しますのは、VHSの開発という、日本でも中堅の会社が世界の電機メーカーを凌いで、そのリーダーとしてこれを開発し、しかもそれで世界基準をつくりあげた。それによって全世界の人々が、ビクターが開発したVHSを見ていただいて、生活を楽しんでいただくという貴重な体験を味わうことができた。

そういう意味では非常にありがたい時期を過ごさせていただいたと思うんですね。

その源は高柳先生なのです。高柳先生なくば、ビクターがそういう偉業を達成することはきわめて困難だったと思うんですね。

しかしよく考えてみますとね、高柳先生はよくビクターにいたな、と(笑)

テレビの発明者であって、NHKの技術の一番トップだった人が、よくビクターにいたなと、ということを見ると、やっぱりこれ我々の「縁」なんですね。

それはもう皆様方がいきさつをご存知のように、NHKにおけるテレビの研究をGHQから阻止されて、高柳先生はテレビの研究をやらせてくれる会社を探したわけです。その時、高柳先生だけだったらこのメーカーも引き受けたと思うんですね。ところが30人のテレビの研究開発者を一人でも残さず採用してくれという条件をつけたから、話がまとまらず、それを認めてくれたビクターに入社が決まったわけです。

非常に大きな奇縁だと思うんですね。しかしながら、ビクターはお入りになった直後頃から労使関係が非常に難しくなっており、その上に会社自身が戦争で大変な被害を受け、販売網もなくなっていたために、経営は急速に悪化し、数年後には債務超過の会社になってしまいました。

その上、半分以上の株を持っていた興銀さんが、GHQの禁止令でビクターの株を持てなくなって、各電機メーカーにお願いしてまわったわけですね。そのために一番最初は東芝さんに、元々が東芝さんですから、東芝さんのところに行ったんだけど東芝さんも戦後

非常に大きな被害を受けておられたから。その時のビクターの財務状態は、資本金が2千5百万円に対して5億円の債務超過。いまの金額に換算すると、だいたい資本金25億円の会社が500億円の債務超過。財産がなくなって500億円財産がマイナスになっているということですから、これはなかなかそんな会社をあの戦後の厳しい時にさすがに東芝さんでも引受出来なかったんですね。

その時に興銀さんは困って松下に持っていった。その時に松下幸之助は工場を見ないでね、「引き受けましょう」と言って松下幸之助との縁がでてきたわけですね。これもまた不思議な縁でね。

その時、松下幸之助は「この会社は犬のマークの商品が欲しいお客様に喜んでもらえる商品を作る会社である。だから、この犬のマークをつくっているビクターの人たちがこの会社を運営していくんだ」という方針を明確にしたんですね。ここが高柳先生が選ばれたビクターへの「奇縁」と共に、ビクターでVHSの開発が生まれる一つの大きなきっかけになったと思うんですね。

実は、私は昭和42年に、京都の南禅寺のほとりに真々庵という松下幸之助の茶室があるんですね、ちょうど東山が借景にありましてね、その茶室に呼ばれてね。幸之助がお茶を点てながら、

「平田くんあ、きみビクターに行って欲しいんや」。幸之助が直に言ったんですよ。

「ビクターという会社はな、ビクターを好きなお客様方に喜んでもらう商品をつくらにやいけんのや。だからね、松下の人間がどこどこ行ったらいかんのや。ビクターの人たちを生かしてお客様に答えなきやいかんのや。だからね、野村さんを社長にお願いしたけれど、百瀬さんにもお願いしたけど、松下からは北野君しか出していないのや。販売チャンネルが弱いからな……。 だけど北野君身体の調子悪くなったからね、君を俺の代わりに出すんや。だからねその方針をしっかりとって云ってくれ」

それとね、もう一つ大事なことを言ったんですよ。「平田君な、ビクターはな、ソニーみたいな会社にならなきやいかんのや。」これが二つ目ですね。

最後にニヤッと笑いながら、「ビクターはな、東京における俺の顔やからな」と。以上三つのことを云ったわけです。三つ目の松下幸之助の東京における顔。これは要するに、「今回のビクター買収は、松下の中に吸収するような会社を買ったということじゃないんや」という意味です。だから幸之助さんはビクターというものを、ビクターの人格というものをしっかりと認めた上でね、この会社を引き受けたんですね。

だから私は先程言いましたようにね、我々は青春時代を、ビクターの素晴らしい栄光の時代を体験できた。それが我々の心の支えである、と。その支えの中に高柳先生がおられる。

それと松下幸之助というビクターに対してそういう思いを持った男がこの5億円を引き受けた。この二つの設定の中にある意味での我々の栄光ができたというような見方がね、歴史的に振り返ってみると言えるんじゃないか、そういうような気がするんですね。

いずれにしても、そういうことで高柳先生はビクターの中にVHS開発の端緒を作っていただき、またテレビを開発していただいたということは当然ですが、それ以外に高柳先生としての高柳魂といいますか、要するに人の育て方、技術のあり方というものに対してたくさんの「遺徳」を残していただいたんですね。

我々はそれをある時期に薫陶を受けて、身につけているわけですね。この身につけたものをそのまま消えさせてはいけない、我々はそれなりに何らかの形でそれを後々の人たちに伝えていかなければならない。それが我々の役割であり、社会に対する責任である、とそういうような思いでおそらく3人の方々は、この高柳会を設立されたんじゃないかと思うんです。

本日このようにたくさんの方々にご参加いただいたということは非常にありがたいことで、意義あることであります。是非お集まりいただいた方々が高柳先生の精神を胸にして、ひとつお互いにお話し合いをして、今後これが続いていくことを祈念して、私のご挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。